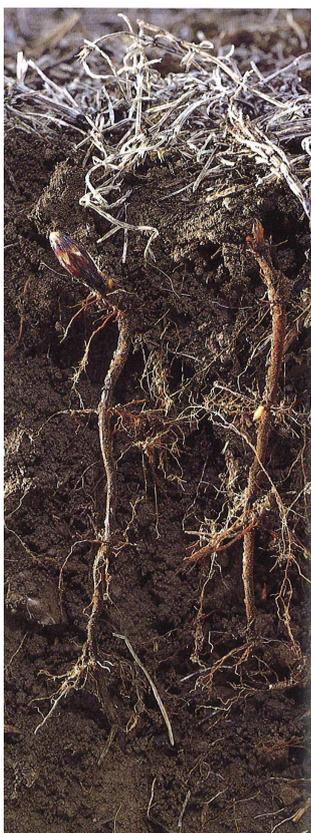




スギナ (Wikipediaより)

地下に匍匐茎を伸ばしながら地上に直立する茎を出すのがシダ植物トクサ類の特徴で、スギナはその仲間です。トクサ類の緑色の茎にははっきりした節があり、茎で主に光合成を行います。現生のトクサ類は15種のみで、その中には高さ1.5mになる種もありますが、同じトクサ類で石炭紀に栄え化石としてのみ知られるロボクは高さ10mにも達し、カラミテスはなんと30m近かったと言われていています。地球の長い歴史の生き残りがスギナというわけです。

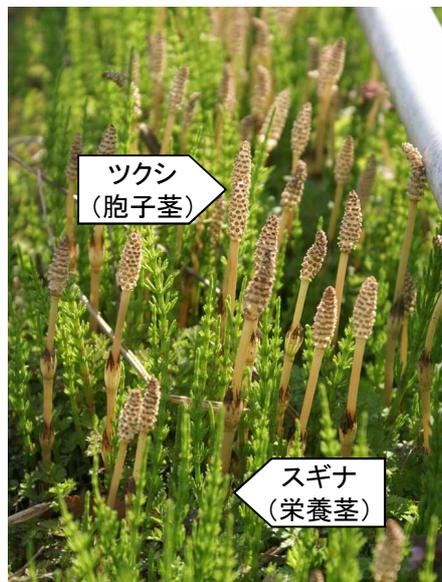


冬のスギナの地下部。畑地などでは深く根を伸ばす(「新・校庭の雑草」より)

一風変わった雑草：スギナ

難防除雑草の一つに数えられるスギナ。しかしほかの代表的な雑草とは少し毛色が違います。というのもスギナは他の多くと異なり、胞子で繁殖するシダ植物なのです。ラウンドアップなどを撒いたのに枯れなかった経験、ありませんか。どういう植物なのか、再確認しておきましょう。

春の風物詩・ツクシ。そのかわいらしさ、見つけやすさ、また山菜としても楽しめることから、春の季語にもなっています。親しみ深いツクシは実は、難防除の雑草・スギナの胞子茎で、ツクシ先端部のツブツブ部分が胞子穂です。ツクシを指ではじくと緑色を帯びたホコリのようなものがたくさん出てきますが、これがスギナの胞子です。ツクシとスギナは外見上全く異なりますが、地下茎でつながっています。むしろ地下茎が本体と言うべきかもしれません。一般にスギナと呼ばれるのも地上部の栄養茎を指します。



ツクシとスギナが一緒に生えている様子
<http://www.drk7.jp/MT/archives/001343.html>

スギナは主軸の節ごとに関節のある緑色の棒状の葉を輪生させますが、上の節ほどその葉が短いので全体としてスギの樹形に似、「スギナ(杉菜)」と呼ばれます。

酸性土壌を好んで生育し、長い地下茎が横に伸び、節々から芽を出して繁殖します。発生の最大深度は5~10cmともいわれ、また根茎の広がりには100cm以上にもなるようで、そのため「本体」である地下茎がある限り根絶は難しいといえます。

その地下茎で越冬する多年生、早春(3月頃)に胞子茎(ツクシ)を出し、初秋(9月頃)まで生育を続けます。芝生地の場合よく芝刈をすれば目立たなくなりますが、芝草の根層にも休眠芽が残るので、芝刈では完全防除できません。

スギナの防除には、スギナに効果のある吸収移行型除草剤を使用しましょう。また土壌が酸性化しないような配慮(土壌改良)も大切です。



胞子茎(ツクシ)と栄養茎(スギナ)が地下でつながっている様子 (Wikipediaより)

製品紹介

ダブルインパクト

多年生雑草に加えスギナ等広葉雑草をも抑制



- 有効成分：グリホサートイソプロピルアミン塩 33.2%
MCPAイソプロピルアミン塩 6.2%
- 毒性：普通物
- 魚毒性：A類
- 原体メーカー：ユニカス
- 包装：5L/缶、2缶入り/ケース

- 多年生雑草に効果の高いグリホサートと、スギナなどの広葉雑草に効果の高いMCPAのダブル効果で問題雑草を長期にわたって抑制します。
- 雑草茎葉部から吸収され、植物体内を移行、特に地下部まで移行して植物全体を枯殺するため、散布前に地上部を刈り払わないでください。
- 土壌中で速やかに不活性化するので、発生前処理では効果がありません。
- 使用に際して展着剤加用の必要はありません。
- 散布液剤の飛散により自動車やカートタンの塗装などへ影響を与える場合がありますのでご注意ください。
- 水源地、養殖池などに本剤が飛散、流入しないよう十分に注意してください。

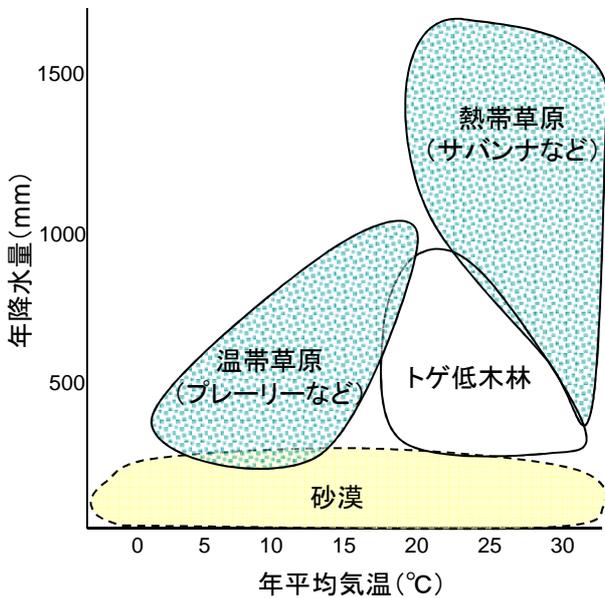
作物名	適用場所	適用雑草名	使用時期	薬量/10a	希釈水量/10a
樹木等	公園、庭園、堤とう、駐車場、道路、運動場、宅地、鉄道、のり面、鉄道等	一年生及び多年生雑草	雑草生育期	1～2L	100L

MONTHLY TOPICS

草原は意外と身近な存在

庭も芝生も、手入れをしないと荒れていき、いつかは森林になってしまいます。ところが全く手入れをしなくても森林にならないところがあります。それは「草原」です。草原とはいったいどういうところなのでしょう。

日本の年降水量はほぼ全国的に1000mmを超えますが、年降水量がこれだけ多いと、たとえ現在どのような植物群落であってもいずれは森林に変化します。このような植物群落の時間的な変化を「遷移」といいますが、遷移が十分に進んでも草原のままのいわゆる草原地帯は実はとても多く、地球の陸地全面積の3分の1を占めています。



中村徹編(2007)「草原の科学への招待」筑波大学出版会 より改変

左の図は世界の乾燥地・半乾燥地の植生分布を気温と降水量の軸上に示したものです。熱帯草原とは低緯度地帯のいわゆるサバンナ、温帯草原とは中央アジアのステップや北アメリカのプレーリーなどです。

これをみると、まず世界の乾燥地・半乾燥地は年降水量が約1500mm以下のところに分布しているのがわかります。逆に言えば1500mm以上だとどこにでも森林が成立することになります。次に1500mm以下でも、気温によって草原になる限界の降水量が違うこともわかります。つまり気温が高いところでは1500mmの雨が降っても草原にしかならないのに、気温の低いところでは500mm以下で草原になり、それ以上だと森林になってしまいます。このことは、気温が高いと植物の生理活性が高くなり多くの水分が必要になることと関係しています。ほかに、年降水量250mm以下だと気温に関わらず砂漠になること、暖かい地方では草原と砂漠の間にトゲ低木林があること、などもわかります。

遠い世界の話のように思われるかもしれませんが、日本にも自然状態の草原はあります。例えば高山では気温が低く生長期が短いため森林が成立できず、お花畑となります。また海岸地帯では砂が動くため木が生えず、生えても風が強いため大きくなれません。尾瀬などの湿原も草原にあたります。

もちろんそれはごく一部の地域で、ゴルフ場やスキー場整備も最近の話ではありますが、長い目でみると実は国内の草原面積は減少しています。高度成長期以前には大面積の草原があり、そこで草を刈って牛や馬の畜舎の敷きわらとしたり、堆肥の材料としたり、何より屋根を葺く材料としていました。草原（二次草原）は田畑や屋敷林などと共に、日本の里山景観の一部だったのです。

芝生はいかにも人工的な景観に思えますが、草原と捉えると意外に身近な存在かもしれません。

取扱い・お問合せは—

緑を育み、未来へつなぐ

 株式会社 サカエグリーン

〒930-0171 富山県富山市野々上147番地
TEL:076-434-0036 FAX:076-434-4968